

『オリエント古絨毯』
（リーグル）の位置

細
井
雄
介

The Position of Riegl's *Altorientalische Teppiche*—————

Altorientalische Teppiche (1891) is the first book of the art historian Alois Riegl (1858–1905) and highly significant in the development of his whole activities. Furthermore, it is regarded as the starting point of theoretically exact studies in Teppich in general. In this matter, however, there occurs to us some anxiety about our ability in appreciating the real value of the book, because traditionally we have not been accustomed to Teppich (carpet, hanging and rug) in our Japanese common life.

Now happily in the reprinted book is added newly a chronological survey of Teppich-studies in the 1970s. With the help of this compact survey we can be certain to judge the correct position of Riegl's original view in his book.

I am aware of most important usefulness of this survey for us, and in order not to miss any detail, with Riegl's Vorwort and Einleitung I have translated this *Bibliographische Einführung* into Japanese here.

The original text is as follows:

Alois Riegl, *Altorientalische Teppiche* – Mit einer bibliographischen Einführung von Urlike Besch [S. I–XXI]. Mäander Kunstverlag 1979 (Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1891).

本稿の目的は後段に置く絨毯研究文献大観の翻訳紹介にある。芸術史記述におけるリーグル (Alois Riegl, 1858-1905) の洞察を重んじ、本論叢では多年にわたり同様の作業を続け、本年 (二〇一四年) 一月には諸篇を併せてリーグルの遺著『造形芸術の歴史的文法』を訳出公刊することもできた。訳者としては先年 (二〇〇八年) の訳出論文集『ヴァフィオの杯』と一対を成すと捉えた書であり、二書を並べることで、あらためてリーグルの生涯を顧みる好機にもなった。この回顧で生じた一所産が本稿である。

ウィーン大学を一八八三年に卒業のリーグルは長短一定期間イタリア留学の年々を経て一八八六年「オーストリア美術工芸博物館 (今日の「応用芸術博物館 MAK (Österreichisches Museum für angewandte Kunst) 」) に見習生として入り、翌一八八七年から一八九八年にウィーン大学教授として転出するまでの十一年間は学芸員として織布部門に属し、織布室の統率者 (Leiter) にもなっていた。はるか後年の二〇〇一年に筆者は六日間ウィーンに滞在、三月二十七日には午前に入館の MAK で各展示室を巡り、絨毯展示室のあとには織布保存室にも入る半日を過すことができた。素人眼には古着屋の納屋としか見えない部屋内では、方向さまさまに走る物干竿に無数ひしめくボロボロ布がぶら下り、伝統の古色が立込める雰囲気、これがリーグルの研究室でもあったかと往昔を偲ぶ感慨は尽きなかった。この織布室勤務の日々に生れたのが一八九三年の著書『美術様式論 (Stilkragen) 』であり、この書でリーグルの名は学問世界でにわかに響きわたり、数多くの言及が明す通り、わが国でも早くから知られていた。だが単行の一書として公刊の処女作となれば、先立つこと二年の著書『オリエント古絨毯 (Altorientalische Teppiche) 』があり、しかもこれは識者によれば、地味で目立たないけれども『美術様式論』と等質の双壁と古来きわめて高く評価されてきた。それではこのように評価させる実質は何であり何処にあるのか。問うてみれば、直ぐさま簡明な答のあつさりと出ないもどかしさが、このたびの回顧に生じた気掛りである。絨毯自体をよく知らぬせいであろうか。

昨年（二〇一三年）もわが国には展観のため海外から幾多の美術品が寄せられ、なかで最も秀抜と喜ばれたのはフランス国立クリュニー中世美術館所蔵『貴婦人と一角獣展』（東京四月二四日―七月一日、大阪七月二七日―一〇月二〇日）である。広大な一堂の壁に垂れて観者を取囲む全六面のタピスリーは、観者それぞれに時の失せる至福を味わせてくれたことでもあろう。このとき求めた図録は手元でいまでも輝いている。ところで、この図録の表紙に採られたのはD《聴覚》の中央部分であり、なかの説明によれば「楽器は小さな携帯オルガンで、東洋の敷物の上に置かれている（l'instrument de musique, un petit orgne portatif, posé sur un tapis oriental. …）」¹。実は、初めてのパリで見えて以来四十年にもなるかの感慨で今回の会場に入室し、中央に立つて全六面を見回したとき、真先に眼を射たのはこのDの画面であり、楽器を支えている小机の覆い布であった。これはリーグルによる作用であったかもしれない。

全画面はタピスリーの制作技法で織られており、このことは画中のオリエント敷物タピ（tapis oriental）の描写についても変りなく、これはタピスリーの制作技法で織込まれたオリエント文様敷物図のはずである。だが六画面全体内でのこの文様の異色はあまりにも歴然としている。この異色の織物を工人画家は貴婦人たちの好尚の的としてわざわざ取込んだのであり、この意識がわれわれの心を惹く。さよう、画中の覆い布に写し取られた原物があつたとすれば、この原物はタピスリーとは織り方を全く異にするオリエント産「絨毯」であり、この織り方によってこそ必然として表れ出るのが画中の覆い布の文様なのである。こうした機微を捉えて西洋と東洋との文化交流に思いを馳せる人も出ようが、今回の図録には見当らず、タピスリーとタピとの相違は話題にもならぬまま終ってしまう。だがこの一点にこだわるだけでもリーグルは必読の書となるのではないか。そして、そもそも絨毯を生活に必須の用具とせずに済んだ文化の目では見えない、大切な視点をも多々教えるのではないか。こうした思いが、さきの気掛りとも重なって、ここで再度リーグルの絨毯論へと向わせた。

再度となるのは、かつて一九八四年四月発足の「民族藝術学会」創設に参画、学会誌『民族藝術』第三号（一九八七年）に「オリエント古絨毯論」と題して、リーグル所論の概要を紹介したからである。このときはリーグル原著の再刊本が出て遠くなく、これを入手できた安堵も刺戟となっていた。

この書に再刊についての説明は一言もなく、全頁アート紙、リーグルの本文は恐らく原著の写真版と思われる。ただし復刻体本文の「まえがき」が始まる前、すなわち本書全頁の冒頭に立つのが、筆者（末尾によりやく署名として記される）Ulrike Besch（生歿年不明）の「文献案内」（S. I-XXI）である。これは一九七〇年代における絨毯研究文献の批判的大観であり、絨毯研究史における学問的出発点の一と目されるリーグルの位置をも、まずは明確な記述としてここに見定めることができる。本稿では本文のリーグル筆「まえがき」「序論」を掲げた後、このベッシェの全文を完訳して邦語による向後の一資料とする。

本年（二〇一四年）秋「民族藝術学会」は大会の期日を春から九月二一日、二二日に変え、国立民族学博物館において創立三十周年記念大会を催す。筆者は創立以来の会員であり、本稿には同じ慶祝の意を籠めて大会への誌上参加としたい。

翻訳の底本は右に述べた再刊本で下記の通りである。後を追う新版は現在なお出していない。

Alois Riegl, *Altorientalische Teppiche – Mit einer bibliographischen Einführung von Ulrike Besch*, Mäander Kunstverlag 1979 [Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1891].

付記—再刊本における1892の印字は誤植であろう【訳者】。

「オリエント古絨毯」

アーロイス・リーグル

まえがき (Vorwort)

オリエントから西洋への贈物はいろいろさまざまあったが、なかで最も願わしい品と算えられるのは、いつの世にも絨毯であった。

古典古代については確かに全般的推測の方が個別の実証よりも多く行われているが、しかし当の推測を支える文献的証拠はまことに夥しいし、一部は意義も多大なものであるから、オリエントから出た絨毯を使うことではすでに古代におけるギリシア・ローマ文化世界が際立っていたと見て、ほとんど誤りはなからう。

中世における事情はさらにはつきりしている。西洋では新たな難しい建造問題の解決に心を砕き、量塊マッスの克服とか静力学的試行や巨大空間形成に努めていて、典型的な作例としてはペリグーの、見映えのする飾りは全くとしてよいほど撥ねつけて簡素で構築的に大きい聖フロン大聖堂 (St. Front zu Périgueux) などを挙げてよからうが、この間サラセンのオリエントに成ったのは、「表」面装飾文様 (Flächenornamentik) の、わずかな要素で合成するが涯しく変容可能な、あの固く閉じられた体系の形成であり、この装飾文様でオリエント芸術は壁や道具のすべて、家具や衣服のすべてを贅沢一杯に覆って、われわれ西洋人が晩くともロマネスク時代以降には記念碑尊重の見方 (monumentale Auffassung) にもとづいて芸術に求めるのが慣わしとなったものに欠けている何かを、眩しいほどに埋合せる。そのオリエント芸術の、こうした飾粧的 (dekorativ) 装備のなかでは以前から絨毯が最も大切な役割を演じていた。とあれば、レヴァントからヴェネツィア人やジェノヴァ人の船でイタリアの港に入り、ここからはア

ルプスを越えて内陸に届いた品が彩り華やかな毛布であり、これで自室内の剥出しの冷い表面を覆うことが西洋人を喜ばせた、とはひとつの驚きでないか。しかもこの偏愛は、飾りを好んだルネサンスの結果としてヨーロッパの芸術創造活動にも豊かな表面装飾文様が自前で具わるようになり、もはやオリエントの財からは少しも得ることがなくなった後ですら、相変らずに持続する。

だがこれほど曙光の国の絨毯に寄せた先祖の偏愛も、当の品が的となっている今日の競争に比べると、すべて挙げたところで小さかったと言わなければならない。当今では、ただ富んで裕かな物持ちばかりでなく、きわめて広い範囲の人々にとって、せめて一枚は本物のオリエント絨毯をもつことがまさしく名誉の問題となっているのである。こうした動きへの一撃がどこから出てきたかも、やはり明かである。

出所は工芸改良運動であって、これは一方でヨーロッパの芸術情勢内に浮び出てきた醜く歪む形の清掃を呼掛け、他方で単純簡素への還帰を呼掛けたが、簡素への還帰となればオリエントの飾粧体系へと導かれるのは必至のことであった。縁飾りにある控え目な蔓草文様を指し、布地の中央部では様式化された花々と愛らしく走る線の戯れとの、どちらにも片寄らぬ模様を言うーなんとゼムパー (Gottfried Semper, 1803-1879) やレッドグレーヴ (Richard Redgrave, 1804-1888) やジョーンズ (Owen Jones, 1809-1874) はオリエント絨毯の長所の讚美を心得ていたことか！ともあれ自国の芸術情勢の惨めさを本気で受止め、住処をヨーロッパの工場製品で醜く汚したくないと思った人は、かなり安い値で一枚のオリエント絨毯を買いさえすればよい。それだけで気持は、家具は間違いないしの芸術作品で豊かになったし居間は趣味もよろしく美を添えた、と確信できた。

工芸改良運動全体に役立とうと並行して進む有様がまことに特徴的で意義も大きかった学問的研究が、はじめてオリエント絨毯の調査に向うのは比較的後のことであった。五十年来ばらばらと論文集や雑誌に現れた個々の覚書

や観察を度外視すると、*芸芸産業* (Kunstindustrie 工芸) できわめて重要なこの部門の学問的論述が始まるのはようやく一八七七年であり、このときレッシングが著書『古オリエント絨毯模様 (Altorientalische Teppichmuster)』において、オリエント古絨毯の信頼できる年代規定に役立つ批評基準の設定を初めて試みたばかりか、以後さらに進む研究が活動すべき範囲の基本線をも引いてくれた。

レッシング (Julius von Lessing, 1843-1908) は、オリエント絨毯の判定にあたり制作技法にかかわる契機がもつ根本的重要性を、まず完全に理解した人であった。そうであればこそさらに、こうした絨毯に厳存する技術と装飾との関係を明示することに、そしてこの精確な基盤の上で、ほとんど見渡しもつかぬ材料を別けて幾つかの群とする作業を開拓することに成功したが、これは根幹において確かにいつまでも妥当性をもつであろう体系的^{ツループ}研究法である。自説の提示と証明のためにレッシングは当然この芸術部門の自身がよく知るようになった最古の遺品を用いたが、ほとんどすべては中世末期およびルネサンス初期の絵画に写し取られた絨毯と極く少数の原物であった。中世末期やルネサンス初期がオリエント絨毯生産時と推測される年代に比べて遙か後代のはずであることは百も承知、恐らくこれがためにレッシングは、絨毯生産の発生の時期を歴史的に推定して語り出すことには、なおきわめて用心深い態度を取っている。

思切つて断固この絨毯の生成および発展という問題に立向ったのはオリエント学者カラバチェク (Joseph von Karabacek, 1845-1918) である。一八八一年の著書『ペルシア刺繍絵スサンシルト (Die persische Nadelmalerei Susandschird)』において、充分な技術的観察に様式的観察および東洋由来の文献情報を並べてカラバチェクがさらに掲げたのは、自身の公開せる制作年代は十四世紀とする一枚の絨毯にはつきりと示される類の、オリエント絨毯装飾法 (Teppichornamentik 装飾文様体系) が始まる原初の故郷はどこかの間であった。探究の結果として古代アッ

シリアが故郷となったが、ササン朝ペルシアには決定的な仲介者の役が認められ、カリフ時代には何がしかイスラム風への改変が認められた。この光のもとに照らせば、オリエント絨毯は中近東技芸の純粹さ極上の所産であると思われた。

カラバチエクの著書『スサンシルト』はオリエント絨毯生産の歴史にとつて最高度に価値ある収穫であることが明かとなった。往昔へと繋ぐ決定的な一步となったばかりでない。決定的なのは、ただ遺例の比較研究から出立するしかなかった者に比べると、この領域で全く別の補助資料を意のままに扱えるオリエント学者によって当の一步が企てられたことである。長い一連の面倒な比較觀察の成果も、自分の知らぬイスラム文献が公刊されるや恐らく、翌日には台無しになりかねないとして、以前は素材の検討に懸念を懷いていたものだが、サラセン人の織布技芸を語る同時代の文献的情報について、これが包み隠されていた神秘の覆い^{ヴェール}をひとりの資料知識該博なオリエント研究者が揚げてくれた瞬間、当の懸念はなくなった。だからとて研究の主題自体はなお尽されていない。カラバチエクの意図は最初から、ほかの絨毯群は完全に無視して、ただ自身の公開する絨毯に現れている特別種類の裝飾文様および技術だけを論じることにあつたからである。

カラバチエクによつて与えられた刺戟にもかかわらず、その後われわれ当面の疑問について名をさらに挙げるほどの進歩が企てられていないとあれば、このことは主に及つの事情に帰せられるとしなければなるまい。第一には中世末期より古いとしてよい比較材料の不足にある。この点では、古代の織布技芸全般を捉える見方に根本的転回を生じさせたサッカーラ (Sakkaran) やアクミーム (Akminim) のエジプト織布出土品ですら、ここからの推論という仕方で当面の主題にとつても些細どころでない帰結が得られたことは否定できないにせよ、やはり即座の事態照明をもたらしてはいない。

一段と古いオリエント絨毯の歴史へと従来より立入って新たに關る道の邪魔となっていた第二の事情は、サラセン芸術初期段階についての知識および表象^{イメー}が、われわれには今日まで欠けていることである。この十年来、西洋の初期中世芸術は芸術史家お気に入りの主題となってきたのに、同時代ビザンティンの芸術活動への注目はきわめて些少、近東諸国の芸術活動への注目は皆無としてよいほどなのである。

双つの事情のうち第一の方は周知のごとく残念ながら今日でも変りない。けれども、この小著では一段と古いオリエント絨毯生産の歴史像の粗描を試みたいのであり、この企ては格別、もとより極く細やか^{きこ}なとはいえ今日の研究目的には意のままとなる手段を用いて、サラセン装飾文様の由来および最初期発展を教える明確な表象^{イメー}の不足という、これまでの第二の障害の除去を筆者が一緒の課題としていることで善しとされよう。詳しく言えば、この課題を果したい筆者に見えた攻撃目標点はとりわけ双つであった。第一点が見えたのは以下の認識からである。すなわち例の「表」面飾粧体系 (Flächendekorationssystem) の一方的な形成および完成を目指した傾向は、オリエントにおけるイスラムの登場やアラブ支配の拡大によって初めて強力になったものでなく、この傾向は後期古代「*Antike*」^{ハント}では「様式」がなお普遍的 (universal) と認められていた時代に早くも紛れない仕方で実力を發揮していたし、さよう、ローマ皇帝時代の移りゆく経緯のなかでヘレニズムの芸術伝統を一步一步と押戻すか歪めるかして、後期ローマ芸術を解体したのはまさしく当の傾向であった、と捉える認識のことである。これを多くの人々がすでに感知していたのは確かだが、しかしこの認識に不足のない妥当性をも得させるために必要と思われたのは、後期古代の飾粧要素とサラセンの飾粧要素との内的親縁性を、これら遺例についての現在の知見が許す限り、ひとつひとつ詳しく検証することであり、また、一箇全般的な表面装飾の図式に少しづつ身を合せようと形式は性格を変えてゆき、こうした変化せる性格こそがサラセン芸術において、まことに奇妙で全くの異国風とわれわれの目には映

るのであり、それゆえことに必要と思われたのは、原初の諸形式が当の変化せる性格を得る過程を追跡することであつた。

劣らず重要な第二点が見えたのは、西欧の、わけてもスカンディナヴィアおよび南東ヨーロッパの、いわゆる家内工業（Hausindustrie）の何年かにわたる調査からであり、経済関係・技術関係・装飾文様関係におけるヨーロッパ家内工業とオリエント絨毯生産との類似はあまりにも瞭然と目立つところであつて、双方の領域間に存在する歴史的事情の精確な研究を要求せずにはないのである。

右に述べた双つのことが主導的な見地であり、これから筆者は本書に記す研究に向つたし、ここを土台として一段と古いオリエント絨毯の生産についてばかりかサラセン芸術の開始期についても色々の誤謬を正して豊かになつた具体像を差出していると信じる。残念ながら今日なお、オリエント絨毯についても、サラセン芸術最古の遺例についても、家内工業の成立についても、あらゆる側面にわたり、利用可能な学問的著作には不足がひどく痛感されるのであり、この忌々しい現状をお考えの上、図版で添えるべき証拠物件が多く、点で不十分に思われるとしても、どうかお許しいただきたい。

ウィーン

一八九〇年七月

上述の「まえがき」に原書では「目次」が続く。本稿ではここに目次見出語を並べるだけとして次段の「序論」へ移る。

目次

まえがき

序論

第一章 平織絨毯

第二章 添毛手結び絨毯

第三章 スサンシルト

第四章 古オリエント芸術との関係における添毛手結び絨毯

第五章 西洋における添毛手結び絨毯

序論 (Einleitung)

普通われわれは、居間で目に付く (an und in unseren Wohnräumen 居住空間) やや大きな表面に被せるために用いる織物状の覆いを、どれでも絨毯 (Teppich) と呼んでいる。

家屋内外の境 (an der Peripherie) には何よりも住む人を取囲む壁 (umgebende Wand) があり、ここには壁掛け絨毯 (Wandteppich) を垂らす。しかもこれを様式的には、ただ閉ざされた壁の上張りと思うばかりか、打抜かれた壁の上張りとも思うので、壁掛け絨毯とは、一方では独立的に立つ柱 (Pfeiler [支柱] und Säule [円柱]) の被覆であり、

他方では戸口の垂れ幕である。さらに、足の下、(unter) には床 (Fußboden) があり、ここには敷物、絨毯、(Fußteppich 床・階段絨毯) を被せる。上、(über) なる天井だけ近代ヨーロッパでは原則として敷物の覆いがないのは、今日のわれわれに青天井のもとや天幕内で住む習慣がないからである。それでも小さな例として、われわれにも祭壇天蓋や玉座天蓋に織物の屋根がある。

居間内、(imertahl) には比較的大きな家具があり、これには織物の覆いを被せる。ただしこのような家具覆いが絨毯と呼ばれるのは、これだけで一枚を成し、被せる家具には外から投げ掛ける独立の覆い、という性格を保っているばあいに限られる。ところが家具ときわめて堅く結ばれていると見えるので、独立という意義が消えて（例えば布張り椅子のように）支え手と新たな一体を成すや、織物の覆いはたちまち絨毯の性格を失う。それゆえ家具覆い、絨毯、(Möbelteppich) が見えるのは、ことに比較的大きな椅子類においてのことであり、さらには机や寝台の覆いとしてである。

こうして絨毯なる総称のもとに以下のごとく別々の三種を区別しなくてはならない――

(一) 壁掛け絨毯、(二) 敷物絨毯、(三) 家具覆い絨毯。

この第一群と第二群とは様式的に、またやがて見る通り少くともオリエントではもともと技術的にも、多かれ少かれ厳しく別々に分けられてきた。第三群は見た目に、あるときは第一群と、あるときは第二群と一緒に、今日なおわれわれの知り得る限りでの古オリエント生活状況内では独立の意義に欠けており、それゆえ以下の考察では最初の二群に論究を絞ることができる。

日常生活で使われる Teppich の語に著しい混乱は、個々の絨毯部類間には使用目的の違いで性格付けられる様式的区別があるのに、これを見抜く目がないという、確かに広く世間に行渡っている洞見不足の結果である。この

不足は何十年もの工芸改良運動を経た今日ですらなお完全には解消されていないと見えるし、工芸に向けて突如目覚めた関心ゆえにこの「Tepich」領域固有の述語を創ろうとし始めた当の時代では一層甚しかった。

レッシングによれば、北ドイツでは「Tepich」の語では敷物絨毯だけを思うこととされている。ところが南ドイツおよびオーストリアでは「Tepich」の語に使用上の規則は全くない。

工芸用語上の相似た疑問が他の領域に生じると、疑問解決のために多くのばあい、もはや使われなくなった過去の言葉遣いに問題を結付けようと努め、歴史的調査を好しとする支配的傾向に助けられて、古い時代の用例から大體は言葉遣いについての成果を引出してきたものであった。しかしこの手段は目下のばあい役立たなかった。まさしく織布用語の領域では、あらゆる時代に、またドイツ人であれ古代の諸民族であれ、あらゆる民族のあいだで、混乱とまでは言わずとも不精確という全般的性格が支配してきたからである。

ドイツ語「Tepich」はフランス語 *tapis* やイタリア語 *tappeto* と同じくギリシア語 *τάπης* (ラテン語 *tappete*) から出ている。この語をホメロスは家具覆い絨毯にしか用いなかったと思われるが、のちヘレニズムローマ時代には、われわれの見る限り、壁掛け絨毯や敷物絨毯の呼称としても使っていた。つまり *τάπης* の語は後期古代にはすでに集合名詞の語義を具えていたのであり、この語義を以下われわれも「Tepich」の語では固持したい。

近代の工芸改良運動に積極的に参加せるヨーロッパ文化民族では、英国人が絨毯の主要三部類全部にそれぞれ明確な呼名を創った唯一の民族であって、敷物絨毯には *carpet*、壁掛け絨毯には *hanging*、家具覆い絨毯には *rug* の語がある。このように区別が鋭く明るい語法のもとでは、すでにインド支配で早くから身近となったオリエントの諸事情に、英国人が詳しく関ってきたことにあると見て大過あるまい。古代語 *τάπης* と英国人が結ばれるのは、ただ *Wirkerei* (Gobelintechnik ユーラン織り技術) を *tapestry* と呼ぶときだけで、これはフランス人から借りてきた語で

あり、まさに右に挙げた意味で中世以来フランス人は tapisserie の語を用いているのである。それだけに一層不思議なことだが、tapisserie の語は tapis から出ているというのに、フランス人は tapis の語を壁掛けやゴブラン織には用いず、北方ドイツ人の Teppich と同様、tapis はあくまで敷物絨毯だけに用いている。しかもこの語法は工芸改良運動によって人為的に初めて生じたものではないと思われる。というのも、すでに一八五一年「ロンドン万国産業博覧会 The Great Exhibition of Industry of All Nations」の芸術関係報告書のなかでラポルド伯爵 (Graf de Laborde) が以下のごとく述べているからである——「tapis とは何か。地面の覆いであって、その上を足が行く。(Qu'est ce qu'un tapis ? Le revêtement du sol, sur lequel portent les pieds)」。

足で踏む床絨毯 (Bodenteppich) への注文と、触られもせずに垂れている壁掛け絨毯への注文とが全く別々になることは少しも疑いない。当然この相違は絨毯部類双方の外面的性状に表れずにいない。ところで外面的性状は何より技術的製作の仕方に依存するから、この事情はおのずと、絨毯の使用目的が異なれば技術的制作法も異なることを強い、したがって薄くて滑らかな壁掛け絨毯は厚くて粗い敷物絨毯とは別様に作られているはずとなる。う。だがわれわれ近代のヨーロッパ文化世界ではすでに、相異なる絨毯の実地使用に関して、様式区別の厳しい原始時代の実情から遠く隔たっているものであり、この事態は、絨毯制作に用いられる織布技術に関して尚更のことである。

詳しく言うと、工場製手工芸品 マニファクチュール の産物は度外視すれば、近代ヨーロッパ絨毯は、すべて グット 対語として作られる類の スミルナ (Smyrna) 産織布をも度外視すれば、近代ヨーロッパ絨毯は、すべて グット 対語は ラウ (rauh) の平織にしても、ヤウヤウ (rauh) のピロートにしても、いずれもみな機械式織機 (mechanischer Webstuhl) の産物として登場する。この過程が始まるのはジャカード紋織機 [Jacquard loom フランス人発明者ジャカル Marie Jacquard, 1752-1834. の名に由来] の発明とか機械発明全般の最新局面が初めての成立時とかではなく、この過程

は西洋の経済的事情にもとづいて、後期古代以降、絹織技芸に伴いつつ生じた織成技術の形成に、ただ目に見える姿で追隨し、また促進された事柄でしかないのである。

絨毯生産の領域で西洋と正反対にオリエントでは、使用目的が異なれば並行して各自に特別な技術もまた異なることが、太古から今日まで多くの点で変化なしに保たれてきた。

ヨーロッパの見方でオリエントと呼ぶものは、地理的意味では厳密に捉えられない。東アジアの文化や芸術がメソポタミアおよびエジプトの文化や芸術と、さまざまな姿の古さや豊かさにおいて少くとも肩を並べないことはな
いと見えても、ヨーロッパから東方へアジア大陸を越えて広がる広大な文化世界全体がオリエントに含まれるのではない。反対に通例のオリエント概念にはヨーロッパから南方に横たわる北アフリカ諸国も算えられる。したがってオリエントなる概念は地理的概念というより歴史的概念であって、大体のところイスラムの伝播範囲と合致する。だがこの概念は生成を思えばなお遙か遠くの古代に遡る。というのもイスラム登場以前すでに永く、当の領域は実質的にヘレニズムの文化や芸術の拡がっていた領域であったからである。それゆえ今日の政治的境界は完全に度外視して、以下われわれの考察で顧慮されるのは北アフリカ・シリア・小アジア・メソポタミア・ペルシア・トランスオクサニア「アラル海オクソス河東方地帯」となろうが、中央アジアにおける最前線の場所は中国の統治下にあるホータン(Khotan)である。

右に挙げた諸地方では古い織布技術がいまでも行われているが、これは測り知れぬ太古における素朴な技芸創造活動が壁掛け絨毯および敷物絨毯を作るために工夫した習わしである。独立的意義のない若干の二次的現象は無視すると、オリエントの絨毯生産では絨毯の主要二部類に応じて主に二つの技術が問題となる——壁掛け絨毯用の平織(Wirkei)と敷物絨毯用の添毛手結び(Knüpung)とである。

しかし直ちに注意しなければならないが、オリエントにおいても、織布その他さまざまな事柄で優勢な保守主義にもかかわらず、今日ではすでに多々、原始時代の素朴で厳格な習わしからは離れており、それゆえ、ことに奢侈特製絨毯（Luxusteppeich）では上記二つの絨毯技術が原初本来の用法に逆らう仕方で行われているのを見ても、決して驚いてはいけない。こうして知られるようになるのが、敷物絨毯の添毛手結び技術で作られた壁掛けであり、逆に平織で作られたと見える床敷きの祈禱用絨毯である。

やがて見るように平織（ひらおり Wirkelei）は一段と原始的な技術であり、いや総じて、どこから見ても織物の最古の形式である。ここから理解できることだが、全般的な保守主義にもかかわらずオリエントですら平織の使用はすでに何百年来きわめて控え目な程度に限られてきた。ところが添毛手結び敷物絨毯（そえけむす geknüpfter Fußteppich）は今日なおオリエントでは最も広範囲に使われており、それゆえ引続き数多く生産されるであろう。ヨーロッパの用語の意味では、これこそがオリ、エント、絨毯、そのもの（orientalischer Teppich schlechweg）であり、この名で理解するのは普通の言語使用のばあい、ただただフラシ天（plüschartig: plush [英]）の床絨毯（Bodenteppich）だけでしかない。オリエントにおけるこの平織絨毯と添毛手結び絨毯との間柄は、どこから見ても、早くも中世には広く根を下していた。このことから以下の考察で、オリエント絨毯の平織にはただ一章（第一章）だけで、残余の章「第二、三、四、五の全四章」はすべて添毛手結び絨毯に捧げても、これは正当として認められるであろう。

ここで順序を断ち、リーグルを離れて、再刊書『オリエント古絨毯』の前段に置かれた以下の「文献案内―ベツシュ筆」で本稿を閉じる

絨毯研究の一九七〇年代における現況報告として、本稿が主眼としたのは、この「文献案内」の紹介である。

文献案内

ウルリーケ・ベツシュ

絵のなかへのオリエント絨毯の模写はすでに中世、例えばジョットのフレスコ画にまで遡ると思えば、それだけに驚きだが、オリエント絨毯についての著作、つまり言葉による絨毯描写が始まるとしてよいのは、ようやく十九世紀初頭のことであった。誰かの購入（ヴェネツィアにおけるデューラーの例）とか取引や制作の事情などを旅行記が誌した附随的な言及を除くと、早い著作からは地誌的あるいは歴史的な判定の記述は見えず、ましてや判定に努める試みは取出すことができない。こうした事実にもかかわらずオリエント絨毯への何世紀にもわたる、ほとんど絶え間ない関心は間違いないと断言できる。この関心は、確認できる最初の全盛期をオリエント貿易期間内で味わい、十八世紀以来のヨーロッパでは、技術的に複製できるかどうかの可能性を問いながら続いている。

以下ここでは絨毯学の発端（実質的な担い手はレッシングとリーグルとボーデ）、次代から今日までに現れた文献、末尾にリーグルあれこれのオリエント絨毯考の三段を全体見取図の試みとして掲げたい。簡略で選択に主観を刻み込んだこの文献表では、さらに目標を、絨毯なる芸術部門の解明に生産的であるようにと、ただの情報提供以上で方法論に寄与する論考の把握に置いたことから、顧みずに終ったものが多数ある。（絶えず新資料を明るみに出してくれるにもかかわらず）夥しい「図版本」は取上げることができなかった。わけでも絨毯の図版が資料整理のもとにより、むしろ写真芸術の媒体として仕えている場合にある。前面に出るのは学問助成の刊行物であり、ことにリーグルだが、オリエント絨毯に関する諸考にリーグルが据えたのは、たんに絨毯学のためばかりか、芸術学の今日までの本質的な基礎を築くに格別重要な思想のための萌芽であった。

絨毯学の処女作、ヨーロッパ添毛^{そえげ}手結び絨毯の装飾文様を組織化するための手本として考えられたレッシング

(Julius von Lessing, 1843-1908) の模様意匠本に、これはなお模倣の純技法的側面に捧げられた著作だが、後日の改良へ向けての柔軟さはすでに見えている。すなわち一八七七年の公刊本においてレッシングは、画中にオリエント絨毯が写されているヨーロッパ絵画に見られる注目すべき材料を集めて、なお現存している壊れ易い材料という狭い範囲に限られるだけでない原理、年代順か地域順なる原理によって絨毯を分類する基礎を築いているのである。

出版年が次となるオリエント学者カラバチェク (Joseph von Karabacek, 1845-1918) の書で、色や象徴や工業技術の諸問題解明を助けるイスラム文献資料に通曉するための、言語修練の前提条件が開かれる。実例の役を演じた織布「刺繍絵スサンシルト (Nadelmalerei Susan[schind])」は確かに絨毯結糸術から出た正格のものではないが、しかしオリエント絨毯の領域への洞見を許す基本的観察はここで提供される。

オリエント絨毯研究の基礎作業については、ウィーンにおける大絨毯展一八九一年の三巻から成る記念碑的出版物たる初めての図録^{カカログ}が一八九二年に刊行されて、さらにひとつの局面が明るくなった。ここに一文「オリエント豪華絨毯製造の年代と起源 (Alter und Ursprung der Manufaktur orientalischer Prachteppiche)」を寄せてバードウッド卿 (Sir George Birdwood, 1832-1917) が民族誌的領野を拓いたのである。基礎^{ユニカ}の確りしたバードウッドの地理および歴史の知識は、ギリシア・ローマ文献への大観と結ばれて、エジプト人メソポタミア人の遺例といわば融け合せつつ、絨毯結糸技術開始の姿を立上らせた。建てられた体系は共感しつつ理解できるものだが、しかしオリエント絨毯の始まりに手掛りを掴むという目的は達せられていない。紀元前五〇〇年頃とされるパツィリク絨毯 (Pazyriteppich) と中世ヨーロッパ絵画面に描かれた最初の絨毯群とのあいだには、今日でも相変わらず、途切れ途切れにしか破れない空隙が大きく口を開けたままである。右と同じ図録^{カカログ}内の文章、ロンドンのサウス・ケンジントン博物館長クラーク (Purdon Clarke, 1846-1911, Director of South Kensington Museum [Museum of Ornamental Art として知られる]) の啓発的な論

考は、もはや確かにほとんど旅行記とは見做し難い。そのつど二年にわたるスペイン、ペルシア、トルコおよびインド滞在の目標はオリエント絨毯の分類、すなわち特定の模様や色や材料を特定の系統や地域へと帰属させることにあった。分類は経験的な仕方で行われたが、幸いにもコラスン (Khorassan) とかバクティアリ (Bakhtiari) などと場所表示から成り、お定まりの命名法にはなっていない。あれこれの概念は可変的で、さまざまな視点で織布を用い深く捉えるという重要な見方に従っていた。

リーグル (Alis Reel 1866-1906) はウィーン絨毯展で展示され図録に収められた品々の解説を引受けたが、このとき配列の原理としてクラークの地域指定を用いてはいない。絨毯そのものを見て、これをほとんど術学的と言えるほどに分析し、隣合う高度文化内に補完要素を探索しつつ、おのれの方角を定めている。目標は東洋および西洋を包む一箇の宇宙的文化空間の発見にあり、この空間を上位座標系として、なかに絨毯の位置も見出されるのである。

リーグルが地誌的とか祭儀的とか社会的など種々さまざまな関係を引入れての描叙は度外視し、他方ではあれこれの芸術的問題をも解釈しつつ反省することで、オリエント絨毯は初めて芸術史的意義の深さを獲得する。このことはわけても一八九一年の刊行、ここに再刊となる著書『オリエント古絨毯』において生じている。

芸術家の、みずから特別な構造に仕立てる織布材料との対決はすでにゼムパー (Gottfried Semper, 1803-1879) が全二巻の著書『様式論 (Der Stil in den technischen und tektonischen Künsten, 1860-63)』で明示していたが、あれこれの芸術問題をリーグルは、たんに芸術家と材料との対決に見るだけでなく、格別には、加飾なる目的の埋込まれている価値体系内、まことに多様な創造へと芸術家を駆立てる価値体系内に見ている。

こうしてリーグルの関心が立つ土台は、もはや (レッシングの例のごとく) 国産「工芸」助長のために手本として

考えられるオリエント絨毯の模範性にでなく、オリエント絨毯は普遍的芸術史の一対象であり、したがって観念的内容および作用力について「芸術意思」を思いつつ究明すべき対象と見る洞察にあった。

リーグルのウィーン大学芸術史講座を継いだストシユゴフスキー (Josef Strzygowski, 1862-1941) の努力もまた、オリエント絨毯の本質および生成を認識して、この絨毯を論証の次元で繰広げることにある。アジアの地に民族芸術 (Volkskunst 郷民芸術) は「権力芸術 (Machtkunst)」の拡がり得る広大な土壌を提供していて、アジア芸術の個体発生を初めて可能とさせる諸々の洞見を仲介役として取次いでいる——すなわち「遺例自体をでなく、なかに潜んでいる芸術的諸価値を研究すること (本質研究)」が大切なのである」。残念ながらストシユゴフスキーでは、道は確かに示されたものの、意義ある成果はほとんど出ていない。

あれこれリーグルの文章公表に続いて間もなく絨毯文献には再度の転回が記録される。一八九二年に論文形式で、一九〇二年に一書として公刊されたボーデ (Wilhelm von Bode, 1845-1929) の小アジア添毛手結び絨毯考は既得のさまざまな認識を一箇の新体系に統合しようとする精妙な作業を示している。ベルリン美術館群総長ボーデには研究方針の因子としては年代問題が初めて中心であると思われ、首唱者レッシングに還ることだが、古い巨匠たちの絵画に描かれたオリエント絨毯の模像にこそ最も適切な解決策を見出せる、とする。偶発的な文字や「数字 (Zahlen)」の翻訳と同じく、様式批判をボーデは現実性の劣るものと見做すのである。年代決定の根拠としてのヨーロッパ絵画から出立となれば、絵画および比較的多く保持されている絨毯の両面から、同時に絨毯はペルシア絨毯の古典期つまりサファヴィ朝 (Safawidenzeit, 1502-1736, 「イラン最大の民族王朝」) の品々に限定となることも最初から決っている。以後の年々、絨毯蒐集家の関心はますます文献に反映し、多数の特殊論文筆者を算えることにもなるが、ボーデでは芸術的普遍史家の精神と蒐集家の関心とが合っって一緒になると言えようか。

一九一四年にボーデの絨毯本第二版が今度はイスラム学者キューネル (Ernst Kühnel, 1882-1964) との共著として出版され、キューネルは章立ての変更を行い、これまでより大きな頁をトルコ絨毯に当てている。この改められた体裁で「ボーデーキューネル本」がオリエンタリズムの今日まで通用する標準書となる。

Julius von Lessing : Altorientalische Teppiche [Teppichmuster nach Bildern und Originalen des XV.-XVI. Jahrhunderts]. Berlin 1877.

Joseph von Karabacek : Die persische Nadelmalerei Susan[al]schid. Leipzig 1881.

Katalog der Ausstellung „Orientalische Teppiche“ des K. K. Österreichischen Handelsmuseums in Wien. Wien, London, Paris 1892 (-1896).

Alois Riegl : Altorientalische Teppiche. Leipzig 1891.

Josef Strzygowski : Die Stellung des Islam zum geistigen Aufbau Europas. Abo 1922.

Josef Strzygowski : Asiens bildenden Kunst in Stichproben, ihr Wesen und ihre Entwicklung. Augsburg 1930.

Wilhelm von Bode : Ein altpersischer Teppich im Besitz der Königl.ichen Museen zu Berlin. in : *Jahrbuch der Königlich Preussischen Kunstsammlungen*. Berlin 1892.

Wilhelm von Bode : Vorderasiatische Knüpfteppiche. Berlin 1902 (1. Auflage).

W. v. Bode/E. Kühnel : Vorderasiatische Teppiche. Berlin 1914 (1. Auflage).

絨毯研究における幾つかの要点を正典化^{カノニゼーション}する時代に続くのは、早くも精通者がおのれの見識を披露し、ヨーロッパ市場の需要に応じて法外に増す資料を、末広がり^{ブロード}に開いてゆく整理体系内へと組織的に編入する時期である。体

裁についても価格についても豪壮たる書冊が、二十世紀初頭におけるオリエント絨毯の価値評定に似合う姿を見せている。

マーティン (F. R. Martin 生歿年不明) 執筆のオリエント絨毯史は造本(二冊本で一冊は絨毯三八〇例を挙げ、なかの十例は絹布上写真版)の体裁に、芸術の品、それゆえにまた学問の客体として価値あることは明かなりと絨毯の代表を見せつけている。

オリエント小芸術のあらゆる分枝から得てきた比較材料に注いだ途方もない経費にもかかわらず、この書は予想してよい迫力の度に達せず、したがってあれこれの憶測を免れない。絨毯の融合完成態の特殊性をイスラムの芸術創造活動に見るのであれば、これはリーグルの思想を継続することに懸っている。

同様の体裁で刊行されたのがサレ (Friedrich Paul Theodor Sarre, 1865-1945) の「サレ／トレンクヴァルト、ケンドリク／タターサルなどの書冊である。

以下に掲げる二十世紀初頭二十年の案内書ハンドブックに共通する趣旨は、自身の研究を一部として添えて既知の全情報を更新すること、新たな蒐集品を公刊すること、分類を精確に示すことである。

F. R. Martin : A History of Oriental Carpets before 1800. Wien 1906-08.

F. Sarre : Altorientalische Teppiche. Leipzig 1908.

R. Neugebauer und J. Oriendi : Handbuch der orientalischen Teppichkunde. Leipzig 1909.

G. Lewis : The Practical Book of Oriental Rugs. London 1911.

W. A. Hawley : Oriental Rugs, Antique and Modern. New York 1913.

J. K. Mumford : Oriental Rugs. London 1916.

W. Grote-Hasenbalg : Der Orientteppich, seine Geschichte und seine Kultur. Berlin 1921-22.

A. U. Pope : Values in Oriental Rugs, Arts and Decoration. New York 1922.

A. F. Kendrick and C. E. Tattersall : Handwoven Carpets, Antique and Modern. London 1922.

Heinrich Jacoby : Eine Sammlung orientalischer Teppiche. Berlin 1922.

何十年か後これまでは實際ただ序に扱われてきただけのトルコ絨毯がエルトマン (Kurt Erdmann, 1901-1964) の格別な価値評定を受ける。ハムブルク大学の芸術史・オリエント学教授エルトマンは一時期イスタンブール博物館にも勤めていた。オリエント絨毯について数多くを発表、いずれも簡潔性と的確性により、また哲学・歴史・芸術理論にもとづく見識によって際立つ学者であり、膨大な資料つまり部分的には誤謬もある無数の刊行物を掌握して比較できる能力のある人である。あれこれ考古学の出土品もエルトマンには役立っている。アルタイ山脈の氷墓中ではいわゆるパツィリク絨毯「前出」が陽の目を見るし、タリム盆地の探検は紀元三―五世紀の添毛手結び絨毯断片を明るみに出すが、無論これらには装飾文様の意義についても年代についても疑問が残る。最後エジプトのフォスタト (Fostat) 墳墓ではオリエント絨毯の十三／四世紀および十五世紀エジプト輸入品の残品が認められる。これら絨毯史を担う支柱群をエルトマンは、トルコの生産中心地はアクサライ (Aksaray) やカイセリ (Kayseri) やコンヤ (Konya) などと詳しく決定できる史料研究によって裏付けた。こうしてエルトマンは全く新たな観点に達したが、この視角は、今までは等閑にされてきた、恐らくは西トルキスタンに発するトルコ絨毯に王冠を授けて、これがベルシア絨毯以前の一層原初的な発明であるとする。

おのれの体系的作業をエルトマンは模様分析 (Musteranalyse) であると考えるが、ここにゼドルマイア (Hans

Sedlmayr, 1896-1984) の行う構造分析 (Strukturanalyse) の影響がないはずはあるまい。模様分析と理解してよいのは、西方の創意と東方の創意との密接な関連を示す要素的部分へと迫る作業である。同時に模様・表面関係についての見方が、オリエントとヨーロッパとでは真向から対立することを認識しなくてはならない。まず与えられるのはオリエントでは「表」面でなく模様である。したがって「表」面の区分や充填は大事でない。むしろ「表」面はただ模様の実質的な担い手として役立っただけであり、無限に存在することで模様は部分的にしか地には縛られないし、それゆえ模様は超越的性格を具えている。オリエントにおける模様の、この顕著な意義を見抜いたことはエルトマンの功績である。

一九五〇年のハムブルク展覧会図録^{カタログ}でエルトマンは初めて、もはや分析的というよりは記述的な新たな道を取る。興味深いのは、技術的な詳細を完全に拒絶していることであり、一八九三年公刊の『美術様式論 (Stilfragen)』で打出された「断続的蔓草 (intermittierende Ranke)」「連続的蔓草 (fortlaufende Ranke)」などリーグルの概念を使用していることである。こうしてエルトマンは、古代エジプト人およびメソポタミア人に共通の土台から出て、東洋と西洋^{オリエント}で関連し合う模様の成立という、リーグルの思想をまたも引継ぐのである。

K. Erdmann : Ausstellungskatalog „Orientteppiche aus vier Jahrhunderten“, Hamburg 1950.

K. Erdmann : Der türkische Teppich, Istanbul 1957 (新版 London 1977).

K. Erdmann : Der orientalische Knüpfteppich, Versuch einer Darstellung seiner Geschichte, Tübingen 1955.

二十世紀初頭、まずは偶発的とはいえ、絨毯を生産する地方の部分地域を語る最初の専攻論文群が現れる。その際さしあたり別々に評価されるのはトルクメン、シナ、東トルキスタンなど、これまで知られていなかった周辺

領域であつて、主要地のペルシアおよびトルコは少い。

トルクメン絨毯

カスピ海東岸地帯の添毛手結び絨毯を最初に詳しく捉えた観察はボゴリュボフ (A. A. Bogolubov 生歿年不明) に
よるが、一九〇一年までロシア軍司令官として中央アジアの民族学的調査を行い、絨毯を蒐めた人であり、そのつ
どのトルクメン遊牧種族のものとしてよい標準模様を識別した。その後ようやく一九四〇年にタシケント人の民族
学者モシコヴァ (W. G. Moshkova 生歿年不明) が、トルクメン絨毯の中心的画因 (Görs ゲルス) の正体は大幅に
様式化せる遊牧種族の紋章であることの明示に成功する。アザデイ (Siawosch Azadi 生歿年不明) が著書で顧慮す
るのは神話であり、トルクメン人種族の社会構造および領土範囲である。数多い刊行書が物語るように、まさしく
トルクメン絨毯は発見の初期に、ことに極めて長く未開拓であつた当地の旅行報告詳細の利用に関して、強い注
目を浴びた。特徴的なことだが、こうした新たな出版物で実質的に協力しているのは自然科学者であり、わけても
技術面について新天地を分析的に研究しては、ますます厳しく委曲を尽している。西トルクメン絨毯の部類を扱っ
たガウベ (Heinz Gaube, 1940-) の功績を減じる文献は出ていないし、ここには一九六八年までに現れた当領域
専攻論文群を教える優れた大観がある。

A. A. Bogolubov : Tapis de l'Asie Central. Petersburg 1908. (後日ドイツ語、英語、ペルシア語に翻訳)

W. G. Moshkova : Göls auf turkmenischen Teppichen. in : *Archiv für Völkerkunde* 111, S. 24-43, 1948. (ロシア語版

発表は一九四六年)

S. Azadi und Rüdiger Vossen : Turkmenische Teppiche und die ethnologische Bedeutung ihrer Ornamente. Hamburg 1970.

H. Gaube : Die Teppiche der westturkmenischen Gruppe. in : *Mitteilungen der Societas Uralo-Altaica* Hef 1, Westurkestan. Hamburg 1968.

中国絨毯

中国絨毯は範疇として別様に定義されてきた。目的欲求から思付かれた品でなく、内容豊かな象徴的意味の実体的な担い手として、中国で絨毯はむしろ副次的な役割を演じているからである。ハクマック (Adolf Hackmack 生歿年不明) はまたもや小冊子で然るべき装飾文様を納得できるように説明している。装飾文様を利用してリーチ (Gordon B. Leitch 生歿年不明) は同時に年代および産地の見取図内へと中国絨毯を整理している。ローレンツ (Hans Achim Lorentz 生歿年不明) の書が初めて比較的多数の図版を優れた複製技術で見せている。この書では同じ主題圈に入る諸他作品も挙げられている。

A. Hackmack : Der chinesische Teppich. Hamburg 1921.

G. B. Leitch : Chinese Rugs. New York 1928.

H. A. Lorentz : A View of Chinese Rugs from the seventeenth to the twentieth century. London 1972 (独訳版 1975).

東トルキスタン絨毯

この絨毯群の重要な地位をまざまざと教えるのは二つの契機である。一つは、文化的刺戟を中国からも西方からもインドからも受けた地域に当の絨毯が出ていることであり、一つは、出土せる織布断片から見るとタリム盆地が添毛手結び絨毯の出生地に当ることである。東トルキスタン人の隔離孤立のゆえに伝統的な絨毯制作は邪魔されずに保たれるままであった。こうした諸々の事柄の重なり合った成果をビダー (Hans Bidder, 1897-1963) が東トルキスタン絨毯論考で総括している。この書の核心はホータンの絨毯制作を謎として、この絨毯の源はオリエントにあり中国にあり西洋にありと説明することにあつて、絨毯学全体にとつての利得は絶大である。東トルキスタン絨毯の問題点には最近年ケーニヒ (Hans König, 生歿年不明) が取組み、問題の一部には下記の論文に言及がある。

H. Bidder : Teppiche aus Osturkestan. Tübingen 1964.

H. König : Beziehungen zwischen den Teppichen Osturkestans und Moghulindiens. in : Festschrift für Peter Wilhelm Meister zum 65. Geburtstag. Hamburg 1975.

図版報告として最近年の邦書がある——訳者

杉山徳太郎『ホータン手織絨毯選集 (Khotan Carpets) 二〇〇八年 (平成二十年)』

インド絨毯

直接インド絨毯なる主題を取上げているのは二論考しかない。一つは前「十九」世紀に出たもの、一つはエルトマンが一九五九年のインド学大会で報告を行い、これが別冊として出たものである。前者ロビンソン (Vincent Joseph Robinson 生歿年不明) によればインド絨毯を遡れる可能性は「ムガル帝国（一五二六—一八五八）」アクバル大帝（一五五六—一六〇五）の統治時代にまでのことである。イスラム教徒紀元一〇〇〇年時の征服以前に早くもペルシア絨毯の輸入があったか否かの確証はまだ無い。また模様がペルシア装飾法のものかムガルインド装飾法のものかの区別にも、インド人の労働および生産の普通ならぬ条件を顧慮した個別的处理が必要である。インド工房製絨毯は永いことペルシア工房製のものとしてされた。こうした絨毯部類の個別的处理を開始しているのが近年あれこれの論考 (May Beattie, Charles Grant Ellis) である。

V. J. Robinson : Indische Teppiche. in : Katalog zur Teppichausstellung in Wien. Wien 1892-96.

K. Erdmann : Der indische Knüpfteppich. Sonderdruck aus der Indologentagung 1959. Hrsg. E. Waldschmidt, Göttingen 1959.

コーカサス絨毯

コーカサス「カフカズ」に出る絨毯を扱うことで研究には二つの新たな次元が現れる。まずは技術面が、さしあたり「コーカサス人」を規定するための、従来より確実な手引となる。コーカサス絨毯についての特殊研究でシュ

ルマン (Ulrich Schürmann 生歿年不明) は「理想的専門家ならば布五 cm 四方で当の絨毯の出所を異論の余地なく確言できるはず」と研究の前提を一般化する。制作の諸特徴は (ここでは専ら材料に関係づけられて) 構造分析の概念で語られるが、こうした特徴こそが全絨毯目録作成のための実質的項目である。以前のコーカサス絨毯研究、例えばホーフリヒターの書 (Zdenko Hofrichter, *Armenische Teppiche*. Wien 1937) とかボーデ／キューネルあるいはマーティンの当該章節では、場所表示がまだ詳しく行われず、「アルメニア人」なる総称が用いられている。

技術的細部の合致を根拠とすることでシュールマンが初めて、場所の一義的な確定に成功したのである。

U. Schürmann: *Kaukasische Teppiche*. Braunschweig (1961. 発行年記載なし)

トルコ絨毯

混成体のオリエント絨毯でつねに最も本質的な成分として重んじられたのはやはりペルシア絨毯だが、ボーデとの共著者キューネル「前出」により、同じ混成体の別種の変容としてトルコ絨毯はくつきりと結晶する。学術誌 (*Burlington Magazine*, *The Art Bulletin*, *Apollo*, *Belvedere* 等々) 一九二〇年代の諸論文に代って一九五〇年代に、外ならぬトルコで幾つかのトルコ絨毯本が刊行されるが、頂点を成すのはエルトマンの『十五世紀トルコ絨毯』である。ここでトルコ絨毯は発生論的にペルシア絨毯より古いと証明される。結果として、将来はペルシア宮廷工房製絨毯もまたトルコ民族生産品の派生態とする見方のもとで判定されることになろう。したがって絨毯の手本なる機能を引受ける可能性は遊牧民の絨毯にある。

K. Erdmann: *Der türkische Teppich des 15. Jahrhunderts*. Istanbul (1954. 発行年記載なし) これには後日の版が

ある——Nachdruck, London 1977.

カイロ絨毯

産地研究にもとづいてエルトマンは、これまで「小アジア産マムルーク朝・オスマントルコ絨毯」とされてきた品々をカイロ産と見定めることに成功する。そのさい依拠したのはヴァレンティナー（Wilhelm Reinhold Valentiner, 1880-1958）であり、わけでも、エジプト・マムルーク期工芸と絨毯模様との親縁性を見抜いたサレ「前出」の論考にあり。

F. Sarre : Die ägyptische Herkunft der sogenannten Damaskus-Teppiche. in : *Zeitschrift für bildende Kunst* XXXI. S. 75-82. 1921.

F. Sarre : Die ägyptischen Teppiche. in : *Jahrbuch der asiatischen Kunst* I. S. 19-23. 1924.

W. R. Valentiner : Catalogue of a Loan Exhibition of Early Oriental Rugs, Metropolitan Museum New York. New York 1910.

K. Erdmann : Kairener Teppiche. in : *Ars Islamica*. Michigan 1940.

ペルシア絨毯

ペルシア絨毯は全然そう頻繁に専攻研究の出でくる品でないが、それでもこれがオリエント絨毯初期研究すべて

の出発点にして案内書の主要成分であることは、驚くに当たらない。例えば諸考察の範例として用いたボーデによってペルシア絨毯は広汎な取扱いを受けたし、高度に発展せる「ペルシア人」に向ける当時の熱狂を言葉で表したホップフ (C. Hopf 生歿年不明) でも同様である。全般的な手ほどきとなるのはヴァインツェトル (Rudolf Weinzeith-Cetintje 生歿年不明) やタターサル (Crassey Tattersall 生歿年不明) あれこれの論考である。最後ボーブ (Arthur Upham Pope 1881-1969) がペルシア芸術全体を六巻本で呈示、構想雄大な論文「絨毯制作の技術」で最初の専門的ペルシア絨毯研究を企てた。この地方の芸術創造活動全体との連関内に捉えてペルシア添毛手結び絨毯の歴史的發展を描く企画は成功し、従来の極めて寄せ集め式であった大量の製品群から發生論的に意義の深い順序整理に至る。この二百頁に及ぶ論文の書評が、これもまた相当な量に達している。この書評でエルトマンはただボーブの成果をドイツ語に纏めるだけでなく、豊かな学識を基底とする補完をも果す。エルトマンがトルコの添毛手結び作業を發生論的に先行のものと明示することで、諸他あらゆる部類の照合基準としてのペルシア絨毯は当の優越的地位を失うのである。こうした研究が足場を得たのは、サファヴィ朝「前出」の古典的作物が残らずヨーロッパの博物館に登場して後のこと、また趣味と開拓精神^{エクスプローリテション}が、資金調達は見込めるし学問的に手付かずでもある新天地と見えた、より原初的な絨毯を追い始めて後のことであった。

エドワーズ (Arthur Cecil Edwards 生歿年不明) は著書『ペルシア絨毯』においてペルシア人現在の絨毯産業を追跡、さまざまな地方を見渡して、絨毯への洞察を深めてくれる。絨毯を制作する諸部族、部族それぞれの地理や歴史の姿を、これほど活々と描いた書はかつて見なかったほどである。ロンドンでは幾度か版を重ねているのに、この啓発的な書がドイツ語に訳されていないのは不思議である。

W. Bode : Vorderasiatische Knüpfteppiche aus älterer Zeit. Leipzig 1902.

- C. Hopf : Die altpersischen Teppiche. Eine Studie über ihre Schönheitswerte. (増補オリエント古絨毯第二版として) München 1913.
- R. Weinzeß-Centjune : Über persische Teppiche. in : *Orientalisches Archiv* III. Leipzig 1912/13.
- C. Tattersall : The Carpets of Persia. London 1931.
- A. U. Pope : The Art of Carpet Making, in : A Survey of Persian Art. London/New York 1939.
- K. Erdmann : Rezension — The Art of Carpet Making, in : *Ars Islamica* VIII, S.121-191. 1941.
- A. C. Edwards : The Persian Carpet, A Survey of the Carpetweaving Industry of Persia. London 1953.

いわゆるポーランド絨毯

ペルシア絨毯の領野における部分領域を成すのが「いわゆるポーランド絨毯」であり、これはリーグルが付けた応急措置の名称である。問題となるのはサファヴィ朝時代のペルシア絨毯で、ポーランド宮廷用に注文で作られた品である。これを主題とする文章は無数あるが、諸他論考への手掛りとなるゆえ一論文だけをここに挙げる。このシュプラー (Friedrich Spuhler 生没年不明) の学位論文は、わけても十六世紀十七世紀の関連ある旅行記文献検討によって、研究の基底構築を果している。

F. Spuhler : Seidene Repräsentationsteppiche der mittleren bis späteren Safawidenzeit. Die sogenannten Polenteppiche. Dissertation. Berlin 1968.

* * *

特殊研究の群を列挙すれば解るように、具体的な文化空間内で演じられる**絨毯史**は、これや諸他あらゆる歴史的学問の実体に属している。それなのに当のこの分科では、順序の諸原理が各個ほとんど分離独立せず、歴史的経過を順々と目に見せてくれない。材料とか、装飾文様その他の図様の内容や意義とか、ヨーロッパのオリエント絨毯受容史とか、ほかの織布媒体との比較とか、また一時期だけに絞った諸調査など、これらは、従来いずれも臆病におずおずと顧慮されてきたに過ぎず、この依然として若い学問で為すべき将来の作業を指示している。

絨毯の技術面は今日なお、ことにいわゆる蒐集家用案内書において比較的詳細に扱われる。この点で特記してよいのはドイツ語圏内ではフーベル (Reinhard G. Hubel 生歿年不明) の教則的嗜好であろう。専心的興味を懷いた人に集約的な洞察を提供するのは、きわめて早い時期のシュテッケル (J. M. Stöckel 生歿年不明) の論文で、これには小アジア絨毯地域における彩色法、添毛手結び技術、材料入手法また市場性についての詳細な説明がある。化学的種類や生物学的種類や顕微鏡的種類の研究であれ、最も現代的な材料研究法については一九七八年ミュンヘンにおけるオリエント絨毯会議 (Konferenz für Orientteppiche) の諸講演が模範的に情報を教えてくれたが、これらの講演は一九八〇年ロンドン刊と約束されている印刷化を待っているところである。

R. Hubel : Ullstein Teppichbuch. Eine Teppichkunde für Käufer und Sammler. Berlin, Frankfurt/M., Wien 1965.
J. M. Stöckel : Moderne Smyrna-Teppiche. in : *Österreichische Monatsschrift für den Orient*. Wien, Februar 1892.

文芸を源泉として絨毯に描かれた姿の意義に関する図像^{イコノロギイ}記述は、通訳可能な象徴的装飾文様が登場する限りにおい

て、萌芽的に研究されてきた。いわゆる絵模様絨毯 (Bildteppich) は、これの写實的絵姿が、模像を欠くイスラムと特異な関係に入るし、手付かずのままである。

Ernst Cohn-Wiener : On the Origin of the Persian Carpet. in : *Islamic Culture*. October 1937.

Schuyler V. R. Cammann : Symbolic Meanings in Oriental Rugs. in : *Textile Museum Journal*, Vol. III Number 3. Washington. December 1972.

個々の絨毯部類を時期別に分けて吟味しようと企てたのは、前出の例えばエルトマン『十五世紀トルコ絨毯』(Erdmann : Der türkische Teppich im 15. Jahrhundert) であり、シュールマン『十九世紀二十世紀のコカサス絨毯』(Schürmann : Kaukasische Teppiche des 19. und 20. Jahrhunderts) である。こうした吟味はそれなりに制作過程の理解を深めさせ、したがって發展史全体の理解深化へと導いた。比較的短い期間内における絨毯制作の近隣地方同士の比較や、宮廷と地方との比較については、まだ著作がない。

幾つかの論考の目標はオリエント絨毯の受容史にある。言いかえると東方諸国民にとつての絨毯の目的は何かと、絨毯の非物質的でもある意義を究明することにある。けれどもオリエント添毛手結び芸術に寄せるヨーロッパ人の関心を活々と何百年も保たせたものが何かはまだ探究されていないし、これまでのところ、絨毯を写し描いた絵画の途方もない総量にもやはり精査はほとんど行われてこなかった。前記レッシングの列挙に従って博物館を通る道はすでに確かにシヨイネマン (Brigitte Scheuermann 生歿年不明) が企てたものの、知られていなかった絨毯群の名札貼布に終わっている。残念なことに、この女性が諸方から集めた膨大な写真資料は行方不明である。エルトマンはヨーロッパとオリエントの相関関係を書留めたが、これを自身の諸他の研究ほどには精密化することがなかった。

ミルズ (John Mills 生歿年不明) はロンドンのナショナル・ギャラリー所蔵絵画に見られる絨毯を精査して、これら絨毯それぞれの特性記述および分類を果している。ヨーロッパ人によるオリエント絨毯受容の問題に、スペイン絨毯の特殊な一例では回答が寄せられた。ムーア人支配が終る一四九二年までイベリア半島で露わであったヨーロッパ・オリエント相互の関係という特例である。これをマツキイ (Louise Mackie 生歿年不明) が十五世紀スペイン絨毯についての講演で立証したのである——前記一九七八年ミュンヘンのオリエント絨毯会議の席上であった。

B. Scheunemann : Anatolische Teppiche auf abendländischen Gemälden. Dissertation. Berlin 1953.

K. Erdmann : Europa und der Orientteppich. Mainz 1962.

J. Mills : Carpets in Pictures. Themes and Painters in the National Gallery. Series 2, Number 1. London 1975.

隣接芸術部門との比較調査という仲介的研究の試みは、すでに例えば前述のマーティンやポープの書で企てられている。困難が多くて立往生となるのは、織布の領野内で作業過程は別々なのに図像形成に生じる相似性を探ろうとする努力である。こうした努力の挫折が見られるのは、例えばコーカサス人・トルクメン人・ウズベキスタン人の刺繍についての特殊研究であり、キリム「綴織絨毯」についての、あるいは捺染素材や織成素材についての専攻研究においてであり、挫折するのは、各自の権限さえ認められるや後は当の分野を門外漢に委ねてしまう、芸術史家やオリエント学者や民族学者に相互の協力が欠けているからである。

参考文献表

エルトマンが一九二八年編集の参考文献は、論文表題をも含めて、すでに一〇〇〇題目を掲げていた。それだけに一層感謝してよいのは前出アザディの引受けた課題、歳月を経て多分三倍の数にはなる著作群を分類し整理するという課題である。書籍だけを挙げた部分は既刊となったが、論文の一覧表が続くはずである。残念ながらアルファベット順の題目整理は実用的でなく、あらゆる著作全部の掲載は無批判的であって、結果として、やはり手に取り易いのはエルトマン一九六〇年刊行書附載の文献表となる。一九二八年に至るまでの古文獻はすべて完全にサレ／トレンクヴァルトの書内に見出される。

- K. Erdmann : Bibliographie der Orientteppiche. in : F. Sarre / H. Trenkwald : Altorientalische Teppiche, Band II, S. 37. Leipzig 1928.
- S. Azadi und M.-E. Enay : Einhundert Jahre Orientteppichliteratur 1877-1977. Hannover 1977.
- K. Erdmann : Der orientalische Knüpfteppich. Tübingen 1960.

リーグルのオリエント絨毯諸考

一九三五年の人名録に芸術史家ティーツェがリーグルの履歴を掲げたとき (Hans Tietze, 1880-1954, in : Neue Österreichische Biographie. 邦訳書『ヴァフィオの杯』所収)、ウィーンの「オーストリア美術工芸博物館」におけるリーグルの最も重要な研究成果として挙げたのは二つ、『オリエント古絨毯』(Altorientalische Teppiche) および二年後

一八九三年公刊の『美術様式論 (Stilfragen)』であった。両書をティーツェは相補う作と見做して、前書ではオリエントのがわから出て地中海芸術との普遍的連関が解明されるし、後書『様式を問う「原義」』では装飾文様の基^{モティーフ}本的意匠から出てリーゲルは当の連関の再検証を行う、と捉えている。

『オリエント古絨毯』刊行の一八九一年、レッシングおよびカラバチエク両人の著書は既刊であった。ベルリンで研究のボーデが最初の成果を公刊したのは一八九二年である。自身の出版物としても絨毯学の出版物としてもリーゲルの『オリエント古絨毯』は創業の書と見做すことができる。リーゲルが後日あれこれの研究で詳しく繰広げる思考過程の数々は前成 (Praformation) の姿で本書に見出される。やがて『郷民芸術・家内仕事・家内工業 (Volkskunst, Hausfleiß und Hausindustrie, 1894)』、上記『美術様式論』や『後期ローマ工芸 (Spätromische Kunstindustrie, 1901)』の著書それぞれへと解き放たれるはずの連関がオリエント織布の複合体を成しており、この複合体 (Komplex) をリーゲルはおのれの諸研究の出発点に置いたのであった。自著の問題提起をリーゲル自身は以下のごとく述べている——

『「オリエント古絨毯」の執筆にあたり何よりも大事としたのは、オリエント絨毯装飾法の本質および起源についての、支配的な根本的直観「見方」を正すことであった。比較的古いオリエント絨毯の年代を規定できる基盤としてよい系譜、すなわち当の装飾法の精確な年代順発展系譜を立てることは、右の書の執筆当時には完全に時期尚早と思われた。尚早なのに系譜作りの下準備もほとんどないところで類似の代物が差出されたのであれば、さきの本質や起源に沿うて語られたことも大方は誤れる前提から出たものとなり、それゆえにまた論拠のない帰結となってしまう」(aus: Ältere orientalische Teppiche aus dem Besitz des allerhöchsten Kaiserhauses, [1892] S. 278)。こうした誤れる前提をリーゲルは、ゼムパーが唱導した類の、作品の成立に技術・材料を過重視する理論内に見ている。

オリエント絨毯に寄せたリーゲルの考察は他にもなお種々の小文章に現れており、これらをここで手短かに再説し

てみよう。

オーストリア美術工芸博物館の紀要でリーグルはオリエントの絨毯制作と西欧との関係を点検する。この論文の土台は一八八九年十月十四日に行われた「オリエント絨毯」についての講演である。

リーグルは一方でオリエントの絨毯結糸法とスラヴ諸地方の絨毯結糸法における類似点を見定め、他方でオリエント絨毯に向けるヨーロッパの偏愛の理由究明を試みる。答はいつでも経済的原理にある。絨毯制作が必要とするのはスラヴ諸地方でも見出せる類の原始的な経営方式（Bediushystem）であり、他のヨーロッパ諸地方で絨毯制作を模倣するには、この経営事情が存在しなかった。それゆえにオリエントから輸入ということの意味はまことに深いのである。

ウィーンにおけるオリエント絨毯大展覧会（一八九二）の年、リーグルは一八九八年まで勤務するオーストリア美術工芸博物館織布部門の主任（Leiter）であった。表題「オーストリア貿易博物館におけるオリエント絨毯展覧会」なる論文内でリーグルが目を注いだ幾つかの新たな視点は、当博物館の品々に即しての研究から生じている。この展覧会の価値および効用の横たわるところは、ただ当初の、将来の工芸活動を助けるといふ教育的目的ばかりでなく、むしろ主としては、オリエント絨毯の歴史を知る歴史的認識にある。

会場では添毛手結び絨毯だけでなくキリム「綴織絨毯」やフェルト絨毯のごとき別種の技術をも見せていたが、この展示の図録に一八九二年のリーグルは共著者として登場する。模写されている展示品の全部にはリーグルの記述がある。

同一年、オリエントを語る月刊誌上に、オリエント絨毯の故郷についての論考を読むことができる。なかで筆者リーグルは論理的思考の流れで中央アジアを絨毯の出生地として示し、その際、ひたすら使用目的だけを追って、

トルコ・タール遊牧民を添毛手結び絨毯の創始者と名付けている。これは遙か後年のタリム盆地発掘によつて確証される仮説であつた。この歴史的付論はリーグルに古代オリエントの諸民族を排去させている。というのも絵画上の絨毯模写では椅子類の使用がつねに指摘されてきたからである。今日なお生産の続いている諸地方にまで添毛手結び絨毯が普及している事實は、各地方をトルコ系民族が征服してきた歴史によることと跡付けられる。

リーグル以降で集中的に再度ようやく、遊牧民絨毯を、原始的な郷民芸術として論じるよりは、むしろ模様の系統史を構成する具体例として挙げ始めるのは、今からほぼ二十年ほど前のことであつた。

新規の前記オーストリア美術工芸博物館紀要一八九四年の論文でリーグルはさらに、ポーランドにおける添毛手結び絨毯成立の問題を取上げる。なかでリーグルの立場に誤解の余地はなく、ペルシアにおける制作を考えよと指示する。一八九一年のポーランド旅行および後日のレムベルク [Lemberg 現在ウクライナの都市リヴィフ [Lviv] — 旧称リヴォフ [Lvov]] 展覧会訪問によりリーグルはポーランドでも絨毯の制作されたことを推測する。この地でリーグルが出合つたのは、紛れもなく西洋的な性格の装飾文様を具える品々であつた。「二〇〇五年秋の参観で得た展示品説明紙 (Copyright : MAK — Österreichisches Museum für angewandte Kunst, Wien, 2000) には „Polen“ - Teppich の誤訳を正して産地・年代は Mittelepersien (Isfahan), um 1700. と明記してある。—— 記者]

一八九五年出版の書『一二〇二年製オリエント絨毯』において確かにリーグルは一織手の欺瞞に引掛つている。この人物は本当は十九世紀初頭作であろうアナトリアの四円柱図絨毯 (Viersäulenteppich) に偽りの年代を結付けていた。だが絨毯の発展系譜がよく見えるという点では、この書もまたリーグル著作の典型であつたことに変りない。この祈禱用絨毯の円柱建築像をリーグルは後期ローマ・ビザンティン芸術期にまで遡及しているのである。

ウィーンにある十三枚の絨毯について、さきの大展覧会図録の記述と同じ頃の執筆であるが「オーストリア帝

室蔵オリエント古絨毯」と題する論文に見られる解釈で、申し分なくリーグルはウィーン狩獵図絨毯 (Wiener Jagdleppich) の年代を精確な分析で突止めて一五二八年とした。これは当の伝説的絨毯の年記として今日まで有力のままである。「大切「本質的」なのは」とリーグルは言う——「サラセン芸術を全体的連関から引抜いて高めることでなく、土着的で自立せる発展を一步一步と過去の歴史的根基にまで遡ることである」。検討した残存の品々をリーグルは先行の最も身近な芸術、ヘレニズム・ローマの芸術内に見ている。中世―近世オリエントの一般芸術史が前提となつてこそ、初めてオリエント絨毯の歴史あり、と捉えているのであろう。

装飾文様組織一枚の構造連関を見詰めて記述の道で確めたリーグルあれこれの根本的洞察は、恐らく将来にとつての指針ともなろう。これらの洞察は絨毯についての知識を拡大させて、ただの直覚的・主観的な価値尊重から最後には、絨毯の諸要素を精確に掴みつつ以前より高次の体験形式の成分へと整える、一箇の価値体系の樹立にまで至ることができよう。そのとき絨毯には、「オリエント添毛手結び芸術の高価貴重性 (Kostbarkeit[en])」とか「本物 (echt) 絨毯」とか「オリエント添毛手結び芸術の純粹無垢 (genuin) なる創造物」等々の決り文句は後方に退いて、イスラム芸術のこれほどにも重要な一部門に相応しい学問性の程度が具わることであらう。

A. Riegl : Die Beziehungen der orientalischen Teppichfabrication zu dem europäischen Abendlande. in : *Mitteilungen des K. K. Österreichischen Museums für Kunst und Industrie*, Monatschrift für Kunstgewerbe Heft 10/11. Wien 1890/91.

A. Riegl : Die Ausstellung orientalischer Teppiche im K. K. Österreichischen Handelsmuseum. in : *Mitteilungen des K. K. Österreichischen Museums*. Wien 1890/91.

A. Riegl : Katalog der Ausstellung orientalischer Teppiche des K. K. Österreichischen Handelsmuseums in

Wien. Wien, London, Paris 1892(-1896).

A. Riegl : Die Heimat des orientalischen Knüpfteppichs. in : *Österreichische Monatsschrift für den Orient*. 18. S. 9. Wien 1892.

A. Riegl : Zur Frage der Polenteppiche. in : *Mitteilungen des K. K. Österreichischen Museums*, Neue Folge V. Wien 1894.

A. Riegl : Ein orientalischer Teppich vom Jahre 1202 n. Chr. Leipzig 1895.

A. Riegl : Ältere orientalische Teppiche aus dem Besitz des allerhöchsten Kaiserhauses. in : *Jahrbuch des allerhöchsten Kaiserhauses* XIII. S. 267. Wien 1892.

メムンコメン 一九七九年 春 Ulrike Besch